

行動展示で 動物のありのままを伝える

私が入園した時、旭山動物園は「あと何年もつか…」と言われていました。予算がないので、自分たちで小屋を改造し、他の動物園からウサギを譲り受け、ふれあい施設を作るのがやっとという状態。また、動物園はいわゆる3Kで、市役所の中でも人気のない職場でした。それでも、動物に関わっていると、預かっている命はどれも尊く、毎日見続けても飽きないし、職員は誰もが動物を素晴らしいと思うようになります。

「奇跡の動物園」と呼ばれる旭川市旭山動物園。

1967年開園の同園は、96年度に入場者数26万人という

過去最低を記録し、閉園の危機に直面しますが、

翌97年から始めた行動展示によって、徐々に来園者が増加。

2006年度には国内で4例目となる年間入場者数300万人を

達成しました。行動展示を考案した坂東 元園長に、

動物園の果たすべき役割について伺いました。

動物の暮らしを通して学ぶ さまざまな命のあり方

坂東

めないと思うんですね。今、私たちは教育活動に力を入れていて、こちらでバスを用意して地元の子どもたちを動物園に招き、動物教室などを開いています。旭山を見続けた子どもが大人になり社会に出た時、「旭川出身のやつって優しいよな」と言われる、そこまでのいかないと本当の結果が出たとは言えない。まだまだ途中です。例えば1本の木を切る時、もうかるからと何もためらわずに切るのか、二度立ち止まるのか。「この木にはたくさんの生き物が生きている」とパツと感じられる、そういう大人に育ってほしいのです。

連携で進める 恩返しプロジェクト

現在、旭山動物園には118種の動物がおり、その中に絶滅危惧種のボルネオオランウータンがいます。このオランウータンの故郷ボルネオでは、私たちの生活で広く利用されているパーム油を採るためのプランテーションが拡大し、熱帯雨林が消滅の危機にあります。オランウータンを見て楽しかった、優しくなれたという気持ちを何らかの形にして動物の故郷に返そうと始めたのが「恩返しプロジェクト」です。企業や多くの方々の支援を受け、マレーシアのサバ州野生生物局と共に「野生生物レスキューセンター」の設立を目指しており、昨年6月、その第1弾となるボルネオゾウの緊急避難施設の第1期工事が完了しました。

今年旭川市内の高校生14名を連れて、施設のペンキを塗るために現地に出かけます。社会に出る前の原体験として、自分たちの暮らしはこういうものを踏み台にして成り立っていることを知ったら、きっと子どもたちも変わるのではないのでしょうか。

ところが、来園者の中には「寝てばかりで、つまらない」と、動物に石を投げる人がいる。私たちが日々感じている動物の魅力が来園者には伝わっていないのではないのか？ ありのままの姿が素晴らしい！と感じてもらいたいと始めたのが行動展示です。

以前、レッサーパンダの立ち上がる姿が話題になったことがあります。その個体だけが特別のように言われましたが、どのレッサーパンダでも向こうが見えない場所を作れば立つ、木に登れないから立つだけなんです。旭山では、彼らの暮らし方をきちんと伝えようと、吊り橋を造りました。制約はありますが、動物たちが一生を過ごす空間なので、できる限り彼らの個性や身体能力を生かせるよう工夫したいと思っています。

それから、旭山では動物に芸やショーをさせるつもりはありませんし、「命は横並び」と考えているので、ことさら希少種を求めることもしません。普通の動物でも十分に素晴らしい、それを分かってくほしいのです。

次世代を育てる動物園を 目指して

動物の生き方や感性を知らないで、自然を守れるでしょうか。特に命については生から死まで連続して見たり、関わったりしなければ、それを大切にする気持ちは育

元 さん

坂東 元(ばんどうげん)

旭川市旭山動物園園長、獣医師。ボルネオ保全トラストジャパン理事。1961年旭川市生まれ。84年酪農学園大学獣医学部獣医学科卒業。86年獣医として旭山動物園入園。95年飼育展示係長、2004年副園長を経て、09年から園長。「もうじゅう館」「べんぎん館」「ほっきょくぐま館」「あざらし館」など、動物本来の能力や習性を見せる「行動展示」を考案し、旭山動物園を全国区の動物園に押し上げた。著書に『動物と向きあって生きる』(角川文庫)、『夢の動物園ー旭山動物園の明日』(角川学芸出版)がある。



岩場で空(?)を見上げるホッキョクグマ



水槽から顔をひょっこりと突き出したアザラン



マレーシアの野生生物レスキューセンターの前で

Gen Bando